

恋に狂い咲き 3

1 未来に憂い　　（真子）

シャワーを浴び終えた芳崎真子は、浴室で思わず「ふうっ」とため息をついた。ちよつと身体がけだるい。体調が悪いわけではない。原因は、慣れない運動をやりすぎたせいというか……

そんなことを考えてしまい、顔が火照ってくる。わ、わたしってば……

焦った真子はほっぺたに両手を当てた。自分を落ち着かせるためにその手にぎゅつと力を込める。真子は、いまキッチンで朝食の準備をしている朝見和磨を思い浮かべた。彼は朝から浣刺としていた。きっと彼女のように、ベッドの上での運動をやりすぎて、だるくなるなんてことはないだろう。

今日から仕事だものね……しゃきつとしないと！

真子は蛇口をひねり、冷たい水を出す。そして、思い切って冷たいシャワーを肩から浴びた。

「きやーっ！」

予想以上の冷たさに、思わず悲鳴を上げてしまう。

「真子っ、どうした!？」

そんな彼の声とともにバタバタと足音が聞こえ、浴室のドアが勢いよく開く。

「きゃあっ!」

今度は違う意味で悲鳴が出た。

「か、和磨さん! 断りもなくドアを開けないでください」

「だっていま、悲鳴を上げたろ? いったいどうしたんだ?」

「それは……水が冷たすぎて……」

「うん? ……水?」

和磨から意味がわからないという顔で見つめられ、途端に決まりが悪くなる。

「きよ、今日から仕事だから、しゃきつと思うと思って、水を浴びてみたんです。そしたら思った以上に冷たくて……つい叫んじゃったんです」

「なんだそういうことか」

そう答えつつ、和磨は真子の裸体を舐めるように見つめる。

「ちょ、ちよっと和磨さん」

真子は見られて恥ずかしい部分を慌てて隠そうとしたが、もちろん隠しきれるものではない。

「和磨さん、その視線、少しは遠慮してください!」

「どうして? 俺ならいいだろう?」

「よくないです」

頬を膨らませて文句を言い、和磨に背中を向けたが、それはそれで恥ずかしい。

「もおっ」

どうしていいかわからず、前を向いたり横を向いたり後ろを向いたりした挙句、真子は和磨を睨みつけた。真っ赤になった顔で……

和磨は愉快そうにこちらの様子を眺めていて、真子はムカっ腹が立った。

「和磨さん!」

怒って叫んだら、胸を隠していた手を掴まれる。ハッとした瞬間、なんと和磨は真子の胸の先端を口に含んだ。

まさかそんな行動に出るとは思っていなかったため、啞然としてしまう。

「あ、あ……」

呆気にと取られて胸に顔を埋める和磨を見つめていると、胸の先端に甘い刺激が走った。

「きゃあっ」

叫んだ真子は、右手で和磨を叩いた。

パチン! と浴室に音が響く。

和磨は真子の胸から離れたが……その額が赤くなっている。

「あっ、ごめんな……ん」

謝ろうとしたら、和磨の唇に口を塞がれた。

「んんっ……」

ふた呼吸ほどのキスのあと、唇が離れる。

「も、もおっ」

不服を口にするが、和磨はくすくす笑うばかりだ。

「おでこ、赤くなっちゃってますよ」

「そうか。でも、自業自得だろう？」

愉快そうに聞き返してくる和磨に、こちらまで笑ってしまう。

「水を浴びたのなら身体が冷えただろう。もう一度、熱いお湯を浴びたほうがいいぞ」
確かに身体が冷えてしまい、少し寒い。

「そうします」

「もう朝食の準備ができてるから、早くおいで」

「はい。わかりました」

和磨はドアを閉め、浴室から去った。

真子は和磨に言われた通り、お湯で身体を温めながら、くすくす笑い続けた。

「和磨さんばかりにやらせてしまつてごめんなさい」

朝食の並んだテーブルについて、真子は申し訳ない気持ちで和磨に言葉をかける。

「そんなこと気にするな。ほら、さつさと食べないと遅くなる」

真子は頷き、カリカリに焼けているベーコンをいただく。

「美味しいです」

「レタスと一緒にパンに挟んでもいけるぞ」

そう勧めながら、和磨は実際にやってみせる。確かに美味しそうだ。

こうして、彼とおしゃべりしながら食べる朝食は最高で、つつい食べ過ぎてしまいそうになる。

「ところで、真子」

「はい、なんですか？」

「聞きそびれていたが……松野と島津は、どうして君の携帯で長々と話し込んでいたんだ？」

その間に、昨日の日曜日のことを思い出す。昨日は友人の島津奈々子が家に来ると言うので、その間、和磨は用事を片付けてくると言つて出掛けていた。そのとき奈々子から、実は同僚の松野圭太のことがずっと好きだったと聞かされたのだ。さらに、その松野が真子の携帯に電話をかけてきて、奈々子と三人で夕食を食べないかと誘ってきた。ちょうど居合わせた奈々子は、テンパった挙句、真子の携帯で松野と長電話を始めて携帯の充電が切れてしまい……

結局そのまま食事に付き合うことになり、和磨と連絡が取れなくなってしまったのだ。

「あのふたり……まだあのままなのよね？」

「うん？ あのままつて？」

「あ」

どうやら、また考えていたことを無意識に口に出してしまったらしい。

「真子？」

「実は……」

真子は朝食を食べながら、簡単に昨日あったことを和磨に話した。

「ふーん。島津が松野と両想いで、よかったじゃないか」

「そうなんですけど」

松野に告白された奈々子は、元カレのこともあり、素直に喜べないようだった。

「ああ、そうだ。和磨さんにも聞きたいことがあったんです」

夕べの電話で、和磨が叔母の凜子と話していたとき、気になることを言っていたのだ。和磨の父である真人が、真子について和磨の母とあることで盛り上がっていたとか……

「孫の話か？」

すると和磨は、あっさり言い当ててきた。

頷いてみせると、和磨は両親との会話を教えてくれる。

「母に君のことを話して聞かせたら、父が、できれば三人くらい孫が欲しいと言い出してね」

真子は目を丸くした。

「そしたら母は、贅沢は言わないと前置きをしながら、できれば男の子と女の子ひとりずつ欲しいなんて勝手なことを言って、父と盛り上がった」

そう口にしなげら、和磨はそのときのことを思い出しているようで苦笑している。

つ、つまり……和磨さんのご両親は、すでにわたしのことを受け入れてくださっているということなのかしら？ わたし、和磨さんのお母さんとは、まだお会いしてもいないのに……

なんだか動揺してしまう。だって、和磨さんは朝見グループの御曹司で……そんなひととわたしが結婚だなんて、どうしたって釣り合わないのに……

たとえ、和磨の家族に受け入れてもらえたとしても、自分の違う家に自分が飛び込むのは怖い。でも、和磨さんと別れるなんて考えられないし……なら、どんなに不安でも飛び込むか……

「両親はもちろんだが、祖母も君に会いたがっていたよ」

ぐるぐると考え込んでいた真子は、和磨の言葉に、ああ、そうだったと思い出す。和磨さんにはお祖母さんがいるんだった。

「どんな方なんですか？」

「僕が祖母に抱いているイメージを、君に伝えるのは控えておこう」

「そうですか……あの、お祖父さんは？」

和磨はいままで祖父について話題にしたことはなかった。

「朝見の祖父は、すでに他界している。だが、母方の祖父母は健在だ。今度会わせるよ」

うわーっ、それもまたわたしにはハードルが高いんですけど……

「そ、そうなんですか……和磨さん、親戚がいっぱいいるんですね」

昨日会った高杉智慧も、和磨の従兄弟だと聞いた。彼の印象は、和磨とはまた違った切れ者とうか……少なくとも柔和という感じではなかった。

「そうだな。君よりは多いな。でも、僕らが結婚したら、みんな君の親戚になる」

身寄りの少ない真子のために、和磨がその言葉を言ってくれたのだとわかる。けれど、実のこ

ろ彼の言葉は真子を委縮いしやくさせた。

真子は生まれてから母の真澄ますみが亡くなるまでずっと、母とふたりきりだった。母が亡くなり、叔母の凜子に引き取られて……つい数日前に父親と兄が見つかるまで、親戚といえるのは叔母の家族だけだった。わたし、親戚付き合いかまるで経験ないのに……和磨さんのご両親や祖父母、そしてたくさんの親戚の方たちとうまくやっていけるのかしら？

和磨さんと出逢えて、しあわせで堪たまらないのに……未来は不安でいっぱいだ。

2 置き去りにご立腹 〔和磨〕

「今日も寄って行くけど、いいか？」

車を運転していた和磨は、会社近くのコンビニを指し、真子に尋ねた。

「いいですけど……数日前にたくさん買ったのに、もうなくなっちゃったんですか？」

真子は戸惑いを浮かべながら聞き返してくる。

「実はな、金曜日に視察を終えたあと、専務室で、会長、社長、常務の三人と食堂の改装について色々話し合ったんだ。そのとき、三人とも冷蔵庫の中にあったドリンクゼリーを珍しがってね、全部持って行ってしまったのさ」

「ドリンクゼリー、気に入られたんですか？」

「飲んだときの顔からすると、味が気に入ったわけじゃなさそうだったな。単に珍しかったんだろ」

苦笑しつつ言った和磨は、車をコンビニの駐車場に停めた。

真子を連れてコンビニに入ると、目的の飲料棚にまっすぐ足を向ける。その途中、真子が「和磨さん」と呼びかけてきた。

「うん？」

「和磨さん、あの店員さんに何かしたんですか？」

和磨は眉を寄せた。

「どうしてそういう話になる？」

「だってあのひと、ひどく怯おびえた目で和磨さんを見ていて……まあ……仕方ないですね」

「なんだ仕方ないってのは。その納得したような言い方、癪かんに障さわるぞ」

「スーッと眼鏡の和磨さんって、雰囲気がちよっと怖いんですもの。それに視線も鋭い感じがして」

「……よく言われる」

仕方なく肯定したら、真子は噴き出した挙句、楽しそうに笑い続ける。

むっとして睨にらむと、真子はくすくす笑いながら和磨の手を取り、飲料棚に向かう。真子の態度に、和磨の機嫌はあっさり直った。

飲料棚の前で、ふたりはドリンクゼリーを探したが、ひとつも見当たらなかった。

「品切れみたいですわね」

頷うなずいた和磨は、踵かかとを返してレジに向かう。

「かつ、和磨さん？」

真子は慌てて和磨のあとを追ってくる。

和磨は、レジの向こう側でしゃがみ込んでいる店員の背中に「君」と呼びかけた。

「ははは、はいっ！」

店員は飛び上がった挙句、着地に失敗して尻餅をついた。

なんだ、ずいぶんと落ち着きのない店員だな。

「君、大丈夫か？」

「すっ、すみません」

店員は腰をさすりながら、なんとか立ち上がる。

「あの、な、なんでしょうか？」

「ドリンクゼリーが品切れなんだが。次はいつ入る？」

「ドリンクゼリー？ ……えっ、えーっと、ちょ、ちょっとお待ちになって、くださりませ」

和磨は眉を上げた。

どうやら真子の言った通り、この店員、俺に怯えているようだな。……まあ、どうでもいいか。

店員は焦りまくって商品の納品予定を調べていたが、しばらくしてようやく顔を上げた。

「お客様、わかりました。ドリンクゼリーなどは、今週の水曜日に入ります」

「なんだ、そんなに先なのか？ 品物は切れないように手配すべきだろう」

「そ、それがですね、金曜日に、ごっそり買い込んで行かれたお客様がおいで……」

金曜日？

後ろから、真子が和磨の腕をつついてきた。彼女に顔を向けると、「お父様……でしょうか？」
と言う。

「たぶんそうだな」

あの親父、買い占めて、あちこちばら撒いたんだろう。親父のやりそうなことだ。

「ないんだったら仕方ありませんね」

「そうだな。ああ、もうひとつ買いたいものがあるんだ。文房具類はあるかな？」

「はっ、はい……文房具は……え、えっと……」

店員は狼狽したように、キョロキョロする。その様子を見かねたのか、真子が「和磨さん、こっちですよ」と案内してくれる。

「何が欲しいんですか？」

「シャーペンの芯だ。しかし、店員より君のほうが役に立つな」

「か、和磨さん」

真子は背後の店員を気にしつつ、和磨を咎めてきた。

シャーペンの芯を買い、コンビニを出て車に乗り込む。すると真子は、和磨の言動に対してお小言を口にした。

「もおっ、和磨さんってば、あんな言い方しなくても……ただでさえ萎縮していた店員さんを、落

ち込ませちゃったじゃないですか」

それを聞きながら、和磨は車を会社の駐車場へと進めた。

「落ち込んだとしても、それはそれでいいだろう？」

駐車場に車を停めつつ、真子にそう返事をする。

「そんな」

異論のありそうな真子^{まこ}を促し、和磨は車を降りた。ふたり肩を並べて会社の玄関を目指しながら、和磨は真子に言い聞かせる。

「いいか真子。店にはいろんな客がいて、彼はその都^つ度^ど色んな思いをする。それが経験になる……」

和磨の言葉の途中で、急に真子が「あっ！」と叫んだ。

「どうしたんだ？」

「大切なことを忘れてました」

「いったい、何を？」

「資格が取れる講座の受講申し込みです。今日まででしたよね？」

そう言われて、先日、会社が費用負担し、社員の資格取得を推進することにしたのだったと思いつく。社員にも通達を出したので、真子もそれを利用して何らかの資格を取るつもりなのだろう。

「あ……ああ、そうだったかな」

確かに申し込みは今日までだったが……真子が受講するというのは、気乗りしない。

真子がそんなものを始めてしまったら、俺のことはおろそかにされそうだ。

「タダなら、絶対に申し込みもうと思ってたのに……申し込み書をもらい忘れてしまつて」

「年四回、チャンスがあるんだ。また次の機会でいいさ」

「もしかして、あれって、和磨さんの発案なんですか？」

「そうだが……」

和磨が答えると、真子は顔をほころばせた。

「それなら、余分な申し込み書とかつて？」

「……ないな」

「いま、目が泳ぎませんでした？　ほんととは持つてるんじゃないんですか？」

「ない、と言つた」

「まさか、わたしが資格の勉強に必死になるのは嫌だからつてことじゃないですよね？」

「まさに、その通りだ」

開き直った和磨は笑い出す。

「もおつ、和磨さん、意地悪しないで……」

片手を振り上げて和磨の胸を叩こうとした真子は、ハツとしたように動きを止めた。

ふたりがいまいるのは、会社の玄関ホールのはぼ中央だ。真子と和磨のじゃれあいに、大勢の社員が注目している。

「あ、あ……」

度肝を抜かれたのか、真子は和磨に何も言わず、その場から飛んで逃げていった。

「あつ、真子」

呼びかけたが、真子は階段を駆け上がって行く。
いくら驚いたにしても、僕を置き去りにすることはないだろう。
向かう先は同じ階なのに……

和磨は自分に向けられているたくさんの視線など気にもかけず、エレベーターに悠々と歩み寄って行ったのだった。

3 誤解はそのまま ー真子ー

二階まで階段を駆け上がり、更衣室の前に辿り着いた真子は、ちょうど中から出てきた奈々子と鉢合わせした。

「なつ、奈々ちゃん、おはよう」

ゼーハーと苦しい息を吐きつつ挨拶したら、なぜか奈々子は、突然「あはははっ」と豪快に笑い出した。

「なんで笑つ……あらっ奈々ちゃん、どうして制服に着替えてないの？」

馬鹿笑っている理由もわからないが……

「わたしらって、やっぱ同類ね」

「意味わかんないんだけど……」

「お嬢さん、あなたの職場はどこでしたかね？」

「あっ！」

そつ、そうだった！ 先週、真子たちのいるシステム部は、二階から六階に引っ越したのだ。それを、すっかり忘れていた。階が変わって、更衣室も六階になったのに……

真子と奈々子は笑いながら、エレベーターに向かう。

「ところでずいぶん急いでやってきたんだけど……どうかしたの？」

真子は玄関ロビーでのことを思い返して顔をしかめた。

「まあ、色々……」

あまりに驚き過ぎて、彼を置き去りにしてしまったけど……和磨さん、怒ってないかしら？
あとで文句を言われそうだなあ。

「なんか、通りすがりにみんな真子のこと見てく気がするんだけど……」

奈々子が周りの視線を気にして言う。確かにすれ違う社員の多くが、真子を見てるし、ひそひそ囁き合ったりしている。先ほど和磨と一緒にいたところを彼らは目撃したに違いない。真子は顔を赤らめ、俯いてやり過ごした。

「もしかして専務さんとのこと、ついに知れ渡ったのかな？」

「事情はあとで話すわ」

エレベーターの扉が開き、すでにひとりでいっばいのところに乗り込む。

「あつ、島津さんに芳崎さん、あなたたち、ふたりとも間違えたわねえ？」
乗り合わせた同じ職場の先輩が、愉快そうにからかってきた。

奈々子は「そういうことでーす」と言つて舌を出す。真子も照れ笑ひした。
六階に到着し、エレベーターを降りる。

「やっぱり夢みたい。わたしたち、ほんとに六階のオフィスに引越したんだね？」

奈々子が信じられないというように声を上げる。まったく同感だ。

興奮気味の奈々子とともに、真子は新しい更衣室の前に立つ。

「奈々ちゃん、開けてよ」

「いいよ。真子が開けなよ」

譲り合つていたら、内側からドアが開いた。

「ふたりとも、ドアの前で何やつてんの？ さつさと入りなさいよ」

くすくす笑いながら同僚が促してくる。ふたりは照れつつ、更衣室の中に入った。

「いやーん、やっぱり素敵い」

今までの、赤錆がついたロッカーの並ぶ薄汚れた更衣室とはまるで違う。

真新しいロッカーの扉を撫でながら、奈々子はうっとり口にする。真子も奈々子を真似て、扉の表面を撫でてみる。

「すべすべだね」

「うん、すべすべ。錆が手につくなんてことも、もうないんだよ」

奈々子が感激したように言うと、更衣室にいたみんなが楽しそうに笑い出す。

みんなが着替えを終えて出て行き、更衣室の中は真子と奈々子だけになった。すると、奈々子は急に表情を変える。

「わたし、昨日から松野さんのことしか頭になくつてさ……引越したことなんて、すっかり忘れちゃつてたのよね」

自嘲しつつ奈々子は言う。

「あれから松野さんと話をしたの？」

「ううん。電話をかけようかと思つたんだけど、どうしてもかけられなくて……」

「どうして？ 少しでも早く松野さんに返事をしてあげればいいのに」

松野はひどく気を揉んでいるに違いないのだ。

「そんなに簡単な問題じゃないの。返事したら付き合うことになるのよ」

その言葉に真子は驚いた。

「簡単とか……だつて、奈々ちゃん、松野さんのこと好きなんでしょ？」

「そ、そりゃあ、……よ」

奈々子が口ごもつた言葉は、もちろん『好き』だろう。

「付き合いたくないの？」

「だ、だからさあ……なんて言うかさあ……」

奈々子がぶつぶつ言っていると、更衣室のドアが開き、深田と新山が入ってきた。

「あつ、先輩たち、おはようございまーす」

「おはようございます」

深田は無邪気な挨拶をし、新山も控えめな笑顔で挨拶してくれる。

「この更衣室、塚田さんと野本さんが業者に指示して、昨日一日かけて整えてくれたそうなんですよ」
深田がそう教えてくれる。

野本さん、昨日は休日出勤していたんだ。昨夜、野本さんと電話で話したのに……考えたら、わたし自分のことばかり一方的に話しちゃって……野本さんやお父さんのことも、聞いてあげるべきだったのに……

「さつき駐車場で塚田さんと一緒になって、そう聞いたんです。塚田さん楽しそうでした。それに、高杉専務のこと、べた褒めしてました。部下をやる気にさせてくれる凄（す）い上司だって……」

「ちよつと真子、専務さんが褒められて、なんであんなに、自分が褒められたみたいに恥ずかしがるのよ」

顔を赤らめている真子を見て、奈々子が笑う。

「そ、そんなんじや……」

そうは言ったものの、その通りなわけで……

真子は照れ隠しに奈々子を睨（にら）み、赤くなったほっぺたを隠して着替えに取りかかった。

「なんか、やつばいいよね」

新しい職場に一步入って中を見回しながら奈々子が言う。真子も同じ感想を抱いていた。

「うん、いいね」

真子は感慨深い気持ちで、奈々子と微笑み合った。

あつ、松野さん……

松野は、すでに自分の席についていた。真子や奈々子が入ってきたことに気づいていると思うのだが、机に屈（かが）み込んだままだ。いつもなら、誰よりも先に明るい声をかけてくるのに……

なんだか胸がつぶれる思いがした。昨日別れてからずっと、松野は辛いときを過ごしているに違いない。彼のことが好きなくせに、どうして奈々子は彼に早く返事をしてあげないのだ。そうすれば松野は救われるのに……

真子は奈々子に視線を向けた。いますぐにでも、松野の心を軽くしてあげてほしい。

「奈々……」

「真子」

奈々子に呼びかけようとした瞬間、背後から声をかけられて真子は振り返った。

拓海だ。真子と目を合わせた彼は、とびつきの笑みを浮かべる。

「あつ、野本さん、おは……」

彼に挨拶を返そうとした真子だが、奈々子と深田がぎよつとしたのに気づき、言葉を止めた。

そうだった。拓海が兄だったことを、新山以外はまだ知らないんだった。拓海が真子を突然呼び捨てにしたりすれば、ぎよつとして当たり前。

「土曜日は楽しかったよ。お邪魔虫はいたけど……」

拓海は周りの反応をまるで気にせず、これまでになく真子に接近した。

奈々子と深田はさらにぎよつとする。ふたりの側にいる新山は何も言わない。どうやらこの状況を楽しんでいるようだった。

「の、野本さん」

真子は周りの反応に困って呼びかけたのだが、拓海はそれをお邪魔虫発言に対する抗議と受け取ったみたいだ。

「言わせてくれよ。それより、これ君に」

拓海が差し出してきたのは、携帯電話だ。

「えっ？ あ……あの？」

「昨日、契約してきたんだ。いま君が持つてるのが白だから、色が変わったほうがいいだろうと思って赤にしたんだけど、どうかな？」

「あの、どうして携帯を？」

「君から電話して欲しいけど、毎晩電話するとなると料金がかさむだろう？ 君に負担は掛けたくないからね。今度からこの携帯を使ってくれ。なんなら、いま持つているほうは解約して、これ一本で……」

「ちょ、ちよっと、真子。野本さん。いったいどういうことなのよ？」

「うん、どういうことって？」

拓海は奈々子の問いかけに首を傾げたが、すぐに状況を呑み込んだようで、くすつと笑う。

「真子は専務さんと付き合うことになったのよ。なんで野本さん……」

奈々子は、真子が手にしている赤い携帯を指さす。

「もう話してるものと思っていたよ？」

拓海は真子に真意を問うように聞いてくる。

「話そうとしたんですけど……奈々ちゃんのほうにも色々あって……」

「真子、こういうことよ？ あんた、専務さんを振って、野本さんに乗り換える気？」

そう言った奈々子は、そこで考え込み、パツと笑顔になった。

「それ、いいかも！」

「は？ 奈々ちゃん？」

「あの居丈高な専務より、野本さんのほうが断然いいよ。あんたとお似合いだわ。真子、あんたの判断は正しいよ」

物凄く真剣な目をして奈々子は言う。どうやらとんでもなく本気らしい。

拓海は苦笑しながらも、どこか嬉しそうだ。

「島津さん、君の判断、最高に嬉しいな」

「でしよう。あんな専務なんかに負けちゃダメよ、野本さん」

「そうするよ」

「野本さんってば、何、話を合わせてるんですか！」

真子がたしなめるように言うと、今度は深田が、異議ありとばかりに話に割って入ってきた。「そうですよ。専務さんはいいいひとですよ。まあ、野本先輩もいいいひとそうですけど……わたしは断然専務さんを応援しますよっ！」

深田は手を振り上げて叫ぶ。ずいぶんと和磨に肩入れしてくれる。

いや、そんなことより、早く事実を告げないと、どんどん見当外れの方向に話がズレていつてしまふ。

「あのね、事情があるの。ほら、野本さんも楽しんでいないで……」

そのとき、始業のベルが鳴り響いた。そして、パンパンと手を叩く大きな音がある。

「お前ら、職場の入り口に突っ立って、いつまでおしゃべりしているつもりだ」

全員が、吉田課長に顔を向けた。職場の中を見回すと、みんながこちらに注目している。

「まずい！ 急いで戻らないと。お騒がせしてすみませんでした。それじゃ真子、またあとで」

早口で言った拓海は、システム部から飛ぶように去っていった。おそらく自分の部署である改造企画部に戻ったのだろう。真子たちも急いで自分の席につく。

結局、拓海との誤解はそのまま、真子はなんともいたたまれない気持ちで仕事をする羽目になったのだった。

4 望みの結果　　～和磨～

さて、今日の仕事に取りかかる前に、やっておかねばならないことがある。

和磨はパソコンを起動させ、目的のファイルを開いた。和磨が考えた社員食堂の構想図だ。

今日の午後、改裝業者の責任者たちがやってくる。そこでどんな社員食堂にするか決定することになっていた。業者からは、すでに予算内で収まる設計図を提出してもらっているが、これではいまいちだ。しかし予算内に収めようと思ったら、どう頑張ってもこんなものだろう。

となれば、もっと予算を上乗せしてもらうしかない。その権限を握っているのは、朝見グループの会長で和磨の父親である真人だ。

さて、どうするか？　普通に予算を上乗せしてくれと頼んだところで、首を縦に振るはずはない。ここは策が必要だ。とりあえず、親父も会議に参加させるか。

和磨は父親をおびき出すため、パソコンのメールボックスを開いた。その瞬間、眉間にぐつと皺しわが寄る。

そこには、智慧からのメールがずらりと並んでいた。

あいつ、携帯だけじゃ飽き足らず、パソコンにまで大量のメールを送りつけてくるとは……

そんな暇があったら、仕事をしろ！

一緒に進めていたプロジェクトから和磨が降りたため、その穴を埋める優れた人材を早く探せと言うのだろう。だが、いまは智慧の馬鹿など後回しだ。

和磨は真人宛てにメールを送った。仕事の進み具合を長々と報告し、最後のほうにさりげなく、今日、最上階に作る社員食堂について業者と最終会議、と書き込んだ。

この最終という文字が重要なのだ。それにつられて、真人は絶対にやつてくる。あとは話の持っていきようで、和磨の構想を現実のものにできるかもしれない。

にやついていた和磨だが、智慧からのメールが目に入り、再び顔をしかめた。

智慧の頭の良さと、ずば抜けた集中力には一目置いているが、どうも目的に向かつてがむしやらになりすぎるきらいがある。そんなときの智慧は、視野を広くして物事を見ようとしな。

和磨は椅子の背に凭れて、天井を見上げた。頭の中に蓄積された人材のデータを検索する。

智慧の眼鏡に適いそうな人材をピックアップした和磨は、そのうちの何人がいますぐ異動可能か調べた。職場の異動については、基本的には本人の意思が尊重される。だが、異動先の仕事内容は魅力があるはずだ。智慧が上司として魅力があるかは別にして……

そういえば、智慧の奴、人選についてずいぶん御託を並べていたな。『俺がひとつ言えば十を察し、二十の行動を起こしてくれるような奴』なんて……

そこで和磨は、その条件にびつたりの人物に思い至った。

拓海……

確かにあいつなら、智慧の要求に応えられる。拓海を送り込んだら、智慧は小躍りして喜ぶに違

いない。さらに、真子の側から邪魔な拓海を消せるな。

その案には、非常に心をくすぐられる。だが……拓海は絶対に異動など望まないだろう。

拓海は、妹の真子のために、以前の会社を辞めてここに転職してきたのだ。もし異動の通達などをしたら、彼は即刻辞職するだろう。もちろん、そんなことをさせるつもりはない。拓海はいまの

和磨にとっても、なくてはならない部下だ。どんなに邪魔でも、あの有能な拓海を手放す気はない。

それに拓海には、聞きたいことがまだ色々ある。けど、あいつは俺と真子が付き合うのを、快く思っていないからな。質問しても素直に答えてくれないのだ。

真子と拓海の叔母である凜子にも、俺はいい感情を持たれていないし……

ふたりは真子の大切な家族だというのにな。なんとか、良好な関係を結びたいものだが……

そんなことを考えつつ、再びメールボックスに目を戻した和磨は、思わず唸る。

智慧からの催促メールが、さらに増殖している。

智慧の野郎、俺を苛立たせることにかけては、並ぶ者がいないな。目の前にいたら、首を絞め上げてやるところだ。

和磨は苛立ちに駆られて、椅子の上でふんぞり返った。

自分の仕事も山積みだというのに……いつまでも智慧などにかかずらってはられない。

有能過ぎる拓海を基準にするからいけないのだ。考えを改めよう。

智慧の要求通りの人材である必要はないのだ。だいたい、そんな有能な奴を送り込んだりしたら、智慧はダメになる。

そのとき、ぱつとひらめいた。そうだ、新山恵美がいんじゃないか？ 元秘書課の彼女の能力がどれほどのものか、はっきりとは見極められていないが……かなり高いと思える。けれどこの人選には、ひとつ問題があった。というのも、このプロジェクトを進める智慧が女性を軽視しているのだ。そんな智慧のもとに女性の新山を送り込んだら、当然一悶着起きるだろう。それがわかっていて新山を送り込んだとしたら、真子にも恨まれそうだな。

そんなわけで新山は候補から外し、再び他の候補を探す。だが、やはり新山が最良ではないかと思えてくる。

うーむ、どうにも、ひらめきに逆らえない。仕方ない、ここはもう流れに任せるか……

和磨は携帯を手に取り、智慧に電話をかけた。

「おうつ、遅いぞ和磨、いったい何をやってたんだ」

横柄^{おうい}すぎる智慧の言葉に、和磨の額がピキツと音を立てる。

「それは俺の言葉だ。メール送信してくる暇があるなら、自分で探せ。この馬鹿野郎っ！」

和磨は怒りに任せ、通話をぶち切る。すぐに智慧から電話がかかってきた。

「見つかったんだな？」

何事もなかったかのように、智慧は会話を続ける。いつものことなので、気にもならない。

「ああ。ひとり、ひらめいた」

「おお、そうか」

嬉しそうに言う。智慧は和磨のひめらきを過大評価している。これまで和磨のひらめきは、常に

いい結果をもたらしてきたのを知っているからだ。

「で、いつ送り込んでくれる。なるべく早くに頼むぞ」

「まだ本人に話してもいない。まずはお前……」

「なんだ、まだそんなところかよ」

和磨は表情を消した。

「その口、いますぐ縫い付ける。そうでないと、この話はなかったことにする」

冷たく告げると、智慧は慌てふためく。

「お、おい。怒るなよ。いつものささいな冗談だろ」

「知らなかったか？ 俺はな、お前の口から出る、ささいな冗談ってやつが大嫌いなんだ」

「ま、まあ、落ち着け、和磨。俺の口の悪さはいまに始まったことじゃない。知ってるだろ？」

「いいか、よく聞け」

凄^{すご}みのききすぎた和磨の声に、智慧が「ひっ」と息を呑む。

「本人の承諾を得られたら、すぐに連絡する。それと、相手の承諾を得られた時点で、この異動は決定とする。お前の拒否は受け付けないからそのつもりでいろ」

「何言ってるんだ。俺はお前のひらめきを、なにより信じてるよ。決して拒否などしない」

「それは良かった。ただ相手が承諾するとは限らない。断られたら俺は無理強いするつもりはないから諦める。そして、俺が協力するのはここまでだ。もしこの話がまとまらなかったらあとは自分で探せ。いいな」

「わかったよ。だが、こんないい話を蹴る奴はいないさ」

「たいした自信だな。それじゃ連絡を待て。俺が連絡するまで、一通たりともメールを寄こすなよ」
電話を切った和磨は、さっそくデスクの受話器を取り上げようとして、ある考えが浮かぶ。そうだ、塚田でも悪くないじゃないか。彼なら性別の問題もクリアできる。そこで和磨は改造企画部に内線かけた。

「はい。改造企画部、塚田ですが」

「塚田君、忙しいところすまないが、君、いま手が空くかな？」

「は、はい。大丈夫です」

「それじゃ、新山君を連れて、いますぐ私のところに来てくれないか」

「新山さんですか？ わ、わかりました。すぐに参ります」

五分とかからず、塚田は新山を連れてやってきた。

「ふたりとも座ってくれ」

和磨はソファを勧め、自分もふたりの向かい側に座った。

突然の呼び出しに、新山は落ち着かない様子だ。塚田は見た目には落ち着いているように見える。

「私がここに赴任する前に、本社で手がけていたプロジェクトがある。だが、私が抜けたために、残してきた相棒が音を上げてね」

「は、はい」

「はい」

ふたりは一緒に相槌を打つ。

「どうしても役立つ人材が欲しいと言った。それで、君らふたりのうち、どちらかに行ってもらいたいと思っている」

「私たちのうち、どちらかにですか？」

塚田は戸惑いながら口にする。新山のほうは黙りこくっている。

和磨は仕事の内容を伝え、ふたりの反応を見た。新山は、もつとやりがいのある仕事をしたいと望んでいた。彼女は飛びつくんじゃないだろうか？ だが、新山は女性だ。智慧とうまくやれないかもしれない。その点、塚田なら……彼は緊張する性質のようだが、能力は高いと思う。

「どうだ塚田君、行きたいか？」

「私は……正直、気持ちには動きます。大きなプロジェクトですから……やりがいがあります」

「ああ、そうだな」

「……ですが、改造企画部の仕事から離れるのは……」

塚田は大きな迷いを見せたあと、息を吐き出して和磨と目を合わせる。

「いま、この仕事を放棄したくありません。私はお断りさせていただきます」

きっぱりとした返事に、和磨は満足を覚えた。

「そうか。君にそう言ってもらえて、正直ほっとしたよ」

「も、もったいないです。これからも誠心誠意、精一杯やらせていただきます」

「ああ。期待している」

和磨は塚田から新山に視線を移した。

「新山君、君はどうだ？」

「わたし……そんな……」

何かを言いかけた新山は、言葉をぐっと呑み込んだ。そして口元を引き締める。

「行かせていただきます」

決意のこもった硬い声だった。その瞬間、和磨はすっきりした気分になる。

収まるところに収まったという感覚……ひらめきは、やはり正しいものだったようだ。

「ありがとうございます」

新山は深々と頭を下げた。

いまの感謝の言葉には、深い思いが込められている。その思いを受け取り、和磨は頷いた。

「君ならやれる」

そう声をかけたが、新山はテーブルに視線を貼り付けたまま身動きしなかった。

新山の覚悟を感じる。先が楽しみになったな。いまの新山ならば、智慧と渡り合えるに違いない。ふたりが出ていき、ひとりになった和磨は、さっそく新山の異動に必要な処理を行った。

それらすべてを終えたあと、待ち望んでいるだろう智慧にメールを送る。メールを読んだ智慧の反応を、この目で直接見られないのが残念だ。女だなんて冗談じゃないと喚くだろう。だが、拒否はできないのだ。

新山は、女性を軽視する智慧に手を焼くだろうが……一矢報いることができるかな？

和磨は椅子に凭れて目を瞑った。

新山の今回の異動、真子が喜ぶような結果になればいいんだが……

ただそうなると、また新たな問題が持ち上がる。元々新山は、異動した野本の穴を埋めるために入った人員だ。彼女が抜けたら、真子の仕事はまた大変になる。

どうしたものかな？ 真子の窮地を簡単に救える人物がいるにはいるが……

複雑な思いを抱えたまま、和磨はデスクの受話器を取り上げ、拓海を呼びつけた。

改造企画部を留守にしていた拓海が専務室にやってきたのは、十数分後だった。

「専務、野本ですが」

ドアの外から声がかかり、机の端に寄りかかって書類を捲っていた和磨は、「どうぞ」と答えた。部屋に入ってきた拓海は、和磨の前まで歩み寄ってきた。和磨は拓海に、新山が本社に行くことになった旨を手短かに告げた。話を聞くうちに、拓海の表情が険しくなる。

「ちょっと待ってください！ いま新山さんが抜けたら、真子はまた大変になってしまう」

「そうなるな。それで君に頼みたいんだが……」

「私？ あ……ああ、わかりました。そういうことですか。真子のサポートを私に任せてくれるんですね？」

頼みの内容を口にする前に理解した拓海は、表情をころりと変える。真子と仕事で関われるのが嬉しいのだから……あまり喜ばれると、和磨としては面白くない。それに、心配にもなる。拓海は相当無理をするかもしれない。ここは釘を刺しておくべきだな。

「理解が早くて助かる。だが……改造企画部の仕事もあるんだ。無理は禁物……」

「もちろんわかってますよ」

拓海は軽く請け合うが、ますます心配になってきた。

「真子の負担を軽くしてやってほしいのは確かだが、拓海、いいな、やりすぎるなよ」

忠告するように言うが、拓海は「ええ」と軽い返事をして肩を竦める。

やれやれ、拓海が仕事のし過ぎで倒れでもしたら、真子が辛い思いをすることになる。さっさと新山の後釜を探したほうがよさそうだな。……さて、それじゃあ本題に入るか。

「拓海、君に聞きたいことがあるんだが」

そう話を切り出したなら、拓海は用心するような眼差しになり、「何を？」と問い返す。

「真子から、彼女が知るだけの話は聞いた」

拓海は苛立ちを見せて口を開く。

「いまは仕事中ですよ。プライベートな話は……」

「彼女の話には、大きな穴がいくつもある」

拓海の言葉に耳を貸さず、和磨は強引に話を進めた。

「君が知っていることを聞かせてくれ」

命じるように言ったら、拓海はむっとした顔を向けてきた。

「なぜ貴方に話さなければならぬんです」

「私が聞きたいからだ」

「理由になりませんね。失礼しますよ」

拓海は立ち上がり、ドアに向かう。

「野本君」

厳めしく呼び止めると、拓海は仕方なさそうに立ち止まり、こちらを振り返った。

「なんです？」

「私は事実が知りたい。君が知っている情報に基づいた事実がね。真子のために、知らないままにはしたくない」

「真子は知らないほうがいいんです。憎しみを持たないほうがしあわせだ」

「君は誰に対して憎しみを持っているんだ。もしか、君の愛する祖母か？」

拓海を興奮させるべく、あえて『愛する祖母』と口にしたのだが、拓海は面白ように反応した。

「やめてくれ！ あんな女、祖母でもなんでもない！」

「何があった？」

拓海は険しい顔で和磨を見る。

「専務、ずいぶんとお上手ですね、人を煽るのが」

拓海の皮肉を和磨はスルーした。

「何があった？」

もう一度問うと、拓海は肩から力を抜いた。そして、疲れたようにソファの肘掛に腰を下ろした。

「あのひとはもう死んだ。何を話したって、いまさらだ。死んだ人間には、貴方だって何もできない」

「何をしたいわけでもない。何度も言っているように、ただ事実が知りたい」
拓海は苛立ったため息をつき、仕方なさそうに口を開いた。

「……祖母は後妻で、僕らとは血の繋がりなんてない。子どもの頃から、ほとんど顔も合わさなかった。あのひとはいつも突然やってきて、好き勝手に振る舞った挙句帰っていった」

そこまで語った拓海は、いったん黙り込む。余計なことを言っつて、話の腰を折らないように、和磨は拓海が再び話し出すのを待った。

「一年ほど前、祖母から連絡がきた。病の床に臥してもう長くないと言われた。話したいことがあるから、入院している病院に来てくれと」

「そうか、行ったのか？」

「行くわけが……最初は無視してた」

荒ぶったように叫んだ拓海は、急に声を落とした。

「あのひとは最悪の性格をしていた。やさしさなんて欠片もなかった。死にそうだからって、いまさら会いに来てくれだなんて虫がよすぎる。絶対に行くものかと思っていた」

「なら、なぜ、会いに行っただんだ？」

そう聞いたら、じろりと睨まれた。

「相変わらず嫌なひとだな。会いに行っつたと決めた発言、ムカつくんですが」

「気に障ったか……すまない」

頭を下げたら、拓海がふーっと息を吐く。

「……ベッドに横たわりやつれた祖母を目にしたときは……憐れに思った……けど」

拓海は唇を噛み締めて、怒りに肩を震わせ始めた。

「拓海？」

「母が来ると言っただんだ」

和磨は眉をひそめた。母とは真澄さんのことだろうが……来るとは？

「そのときの僕は、母のことを嫌っていた。母は父に何も告げずに、離婚届を置いて勝手に家を出たと……そう思い込んでいたからだ……本当は違ったのに……」

拓海は激しい後悔に苛まれていたようだ。

「拓海。君は真実を知らなかったんだ。自分を責めるな」

「知った風なことを言うな！」

怒鳴った拓海はハツとし、口を押さえた。

「すまない」

謝った拓海は自分を落ち着かせるように息を吐き、また口を開いた。

「あのひとは、死を前にして錯乱していたのかもしれない。自分の枕元を指して……『ここに真澄さんが現れて、わたしのことを睨んでくる』と……『わたしのことを恨んで、呪い殺そうとしてる』と言っただんだ。僕はそれまで、母は生きているものと思っつていたから……祖母が何を言っつているのか、まるで理解できなかった」

拓海は両手を握り合わせ、自分の感情を必死に抑え込んでいる。和磨はゆっくりと拓海に近づい

て行った。

「母は離婚後、すぐに再婚したと父に聞いていた。それが……再婚などしていなかったばかりか……すでに死んでいたなんて……」

激昂した拓海は、思い切り腕を振り上げ、拳をソファに叩きつける。和磨は拓海の背後に回り、彼の肩に両手を置いた。振り払われるかと思っただけ、拓海はそうしなかった。

「どうやって真澄さんを追い出したのか、聞いたのか？」

「父が他の女を囲っていると、あの女は母に吹き込んだらしい」

そうか……それは、『あの男は金に飽かせて女を囲った』という凜子の言葉と符合する。

「母がすぐに信じたとは思えない。あの女の巧妙な嘘に翻弄されて、最終的に離婚届に判を押して家を出たに違いないんだ。くそっ！」

拓海は自分の腿を打ち据え、さらに言葉を続ける。

「母は、僕を連れて出ようとしたらしい……あのひとは、母だけを追い出すのに苦労したと言ったんだ。そのときの言葉は忘れられない。和磨、お前にも聞かせてやるよ。『満足なお金も持つてなかったせに、育てられるわけがないわ。でも、離婚届はもうこっちの手の内だったから、あの女だけを追い出すのに成功したの』と……」

そう言い終えた拓海の口元が小刻みに震え出す。和磨は拓海の肩を力一杯掴んで揺すった。拓海を力づけたいし少しでも慰めてやりたいが、その術が見つからない。

「様子はおかしかつたが、祖母はどこか自慢げに見えた……僕は初めて、ひとに対して本気で殺意

を抱いた。いまでも、あのときの祖母の首を絞めてやればよかったと思うことがある」

「だが、もう亡くなった」

「そうだ。もうこの世にいない。母以上に辛い目に遭わせてやりたいのに、それもできない」

「真子のことは、そのときに知ったのか？」

「ああ。ふと思いついたように……『そうそう拓海さん、あなたと血の繋がった妹はひとりぼっちで暮らしているわよ』と……」

「君がどれだけの衝撃を受けたか……俺にも想像がつくぞ、拓海」

「……ふふっ」

自虐的な心境にあるのか、拓海は笑う。

「それで君は母親と妹について調べさせたんだな？」

「ああ。だが……祖母のことは報告になかった」

凜子さんか……

「名の通り、凜々しい人だぞ。君にはやさしいだろうが……俺には敵意むき出しだ」
疲れたように言ったら、拓海が顔を上げ、和磨を見る。

「和磨、君は叔母と会ったことがあるのか？」

「いや、電話で話しただけだ。ああ、凜子さんは簡単に会える距離にいないぞ」

「えっ、海外なのか？」

「違う。国内だが飛行機を必要とする距離なんだ」

「叔母さんのことは何も知らないんだ……父も叔母さんの現状については何も知らないし……和磨、叔母さんについて知っていることがあるなら、教えてくれないか？」

「俺からでいいのか？ 真子から直接聞いたほうがいいんじゃないか？」

「まあ……確かにな。けど、なかなかその機会が……」

そう言った拓海は、和磨に目を向ける。機会がないのは和磨のせいだと文句を言うのかと思っただけ、そうではなかった。

「真子はいまのワンルームを引っ越していないと言っていたが……互いの家に……その、泊まったりしてるのか？」

拓海は真子と和磨の関係がどこまで進んでいるのか測りかねているのだろう。

すでに深い仲になっているなんて、こいつはもちろん知りたくないよな。さて、どうしたものか？

いっそ、すでにワンルームで同棲していると、はつきりさせたほうが……

口を開きかけたら、拓海が慌て始めた。

「いや、いい、答えなくて……この質問については忘れてくれ」

「そうか」

まあ、本人がそう言うのなら……

「凜子さんの電話番号を教えよう。電話をかけて話してみたらどうだ？」

「……そ、そうだな。叔母の存在を知らなかったから……どうにも実感が湧かないが」

そこで拓海は、我に返ったように周りを見回す。

「あつ、まずい。すっかり話し込んでしまつて……仕事の最中だというのに」

拓海は和磨を見て、少々気まずげな顔をする。たぶん感情的になったことが恥ずかしいのだろう。

「専務。もう仕事に戻りますが、構いませんか？」

「ああ、私こそ仕事中に私用で呼び出してすまなかった」

拓海が去り、和磨も仕事に戻った。拓海から聞いた話は、あとで整理するとしよう。

5 頬の緩む達成感 〈真子〉

そろそろ十時の休憩時間になるところで、真子は仕事の手を止めた。

そっと周りを見回してみる。すると数人の同僚と目が合ってしまった、真子は慌てて顔を伏せる。

もおつ、野本さんのせいだわ。

仕事開始直前の拓海の行動のせいで、みんなにおかしな疑惑を植え付けたままだ。おまけに、隣の席の深田は、仕事中にもかかわらず、拓海より和磨を選ぶべきだとしてくく言ってくるし……

拓海は兄だという事実を伝えればいいのだろうが、それを聞いた深田は大人しくなるどころか、さらに騒ぐかもしれないと思えて口にならなかった。

松野さんと奈々ちゃんのことにも気になってならないし……だって松野さん、ずっと暗いんだもの。見ていられない。奈々ちゃんってば、早くどうにかすればいいのに……何を考えているのかしら？

もどかしいっらない。

それに新山さんのことも気になる……

新山は、一度塚田に呼ばれて席を外したあと、ひどく考え込んでしまっているのだ。

「あの、新山さん、何かあったの？」

声をかけると、新山はゆっくりと真子に顔を向けた。

「……芳崎さん、わたし……いえ、なんでもありません」

新山は何か言おうとして、結局何も言わずに首を振る。何か言いにくいことなのだろうか？すると、後ろから肩を叩かれた。振り返って見たら奈々子だ。

「真子、あんたさあ、よくよく考えたら、専務と切れてるわけじゃないんだよね？」

ほっぺたがくつきそうなほど顔を寄せて、奈々子は囁いてきた。

「奈々ちゃん、そのこと話すから……とにかく外に出ようよ」

新山のことも気になるが、まずは奈々子の誤解を解くしよう。

立ち上がった真子は、奈々子を連れてドアに向かった。当然という顔で深田もついてくる。新山に目を向けると、いったんは立ち上がりかけたものの、俯いてしまう。

「新山さん、一緒に」

真子は新山を明るく誘った。何か心に抱え込んでいる様子の新山を、そのまま置いていくたくはない。新山は一瞬迷ったようだが、小さく頷き、真子たちについてくる。

内緒話に適した場所ということで、真子は三人を更衣室に連れて行った。

「で、今朝の野本さんの言動って、どういうことなのよ？」

中に入ってすぐ、奈々子が問い詰めてくる。

「それがね……昨日会ったときに、奈々ちゃんには話そうと思ってたんだけど……ほら、色々あったでしょう？ それでつい話すのを忘れちゃって……」

「なんの話よ？」

「つまりね……そう、金曜日の飲み会で、野本さんが席を外しているとき、彼の携帯に電話がかかってきたの」

「飲み会のときに電話がかかってきたことと、野本さんが真子のことを呼び捨てにした挙句、専用の携帯を渡すことが、どう結び付くってのよ」

「ちゃんと結び付くの。奈々ちゃん、そんな風に口を挟まれたら話が余計に長くなっちゃうから、とにかく最後まで黙って聞いてて」

「なら、さくさくつと話してよ。でないと、休み時間が終わっちゃうわ」

「それじゃ、さくさくつと話すわ。実は、野本さんはわたしの実の兄だったの。ねっ、新山さん」長々とした説明を省き、真実を口にした真子は、すでにこのことを知っている新山に声をかけた。

「はい。とてもびっくりしました」

「ちょ……ちよつと待ちなさいよ！ なんですって？ なんて言った？ 野本さんが兄？」

「真子先輩、冗談きついですよ」

深田はそう言って、ケラケラ笑う。

「ちよつ真子。いったいなんの冗談よ！」

目くじらを立てて怒る奈々子に向けて、新山は「本当ですよ」と口添えしてくれる。

「野本さんは芳崎さんの実のお兄さんなんだそうです」

「ちよつとお。なんで新山さんが知ってるのよ。このわたしが知らないのに」

「だって、奈々ちゃんひどく酔っぱらってて、松野さんと盛り上がってたじゃない」

「あー、うんうん。確かに、おふたり盛り上がってましたねえ」

深田の指摘に、奈々子は真っ赤になった。

「そ、それで、ちゃんとわかるように説明しなさいよ」

「ちゃんとわかるように説明しようとしたら、奈々ちゃんがさくさく話せて……」

「わかった。わたしが悪うございました。ねえ、本当に野本さんは、真子の兄だったの？」

「うん。一昨日、野本さんの家に行って、父にも会ったの」

「父？ あんた、兄だけでなく、父まで見つかったの？」

「野本さんの父親がわたしの父親だから」

「あっ……そりゃあそうよね」

「奈々子先輩ってば、面白い」

深田が笑い出し、奈々子はむっとして深田の頭をパチンと叩いた。

「いたつ。叩かないでくださいよお」

「そんなこと、どうでもいいわ。それで飲み会の際の電話とどう繋がるの？ その電話をかけて

きたのが、野本さんの父……つまり、あんたの父親だったとかいうわけ？」

「当たり前」

「けじさ、電話で話をただけで、なんで相手が父で、向こうも娘だつてわかったのよ？」

「わたしが母の姓の芳崎って名乗ったから。そこに野本さんが戻ってきて……事実を明らかにしてくれたの」

「驚きだわ。信じられないわ」

「本当ですよ。野本先輩が真子先輩のお兄さんだったなんて……へーっ」

「野本さん、もちろん偶然妹のいる会社で転職してきたわけじゃないわよね？」

「ええ。わたしのことを探してくれて……それでここにやって来たって……」

「探してって……なんでいま？ それになんですぐに名乗らなかったのよ？」

「それも色々わけがあって。でも、いまはそんなことまで詳しく話している暇はないから、また今度話すわ」

「ええーっ、気になって仕事に手につかないわよ」

「わたしですよ」

奈々子と深田は口々に不満を言うが、真子としては、まず奈々子に松野をなんとかしてやってほしかった。

「それより、奈々ちゃん」

「何よ？」

「松野さんにどうして早く返事してあげないの？ 松野さんが可哀相よ」

「松野先輩に返事って、どういうことなんですか？」

深田が瞳をキラキラさせて聞いてくる。これは恋愛話だと、すぐにわかったらしい。

「だ、だから、そう簡単じゃないんだってば」

「えーっ、松野先輩と奈々子先輩、やっぱりそういうことだったんですか？」

「やっぱりって何よ？」

「だって、ふたりにいい感じだなんて思っていましたから」

「……そ、そう？」

「はい」

明るく顔く深田を見て、奈々子は複雑な顔をしていたが、急にむっとして腕を組んだ。

「真子、その話、こんなところで持ち出さないでよ」

「だって、返事を待ってる松野さんが見てられなくて……もしかして断るつもりなの？」

「だから……と、とにかく、わたしのことは、いまはいいの。それより新山さん、あなた、様子がいつもと違うけど……何かあったんじゃないの？」

それは、真子も聞きたいことだった。奈々ちゃんも気づいていたんだ……

硬い表情をした新山は、躊躇いを見せたあと、口を開いた。

「実はわたし……職場を異動することになったんです」

思ってもいなかった話に、真子は啞然とした。

「異動って、なんで？ この間したばかりじゃん？」

奈々子が信じられないというように叫ぶ。真子だって同じ気持ちだ。新山が来てくれて、やっと仕事で順調に回り出すとほっとしていたのに……

「そんな馬鹿な話ってある？ 新山さんがいなくなったら、また真子が……そうだ専務よ。真子が彼に頼めばいいのよ。彼の力で、この異動を取り下げてもらえばいいわ」

奈々子はそう言うと、更衣室から飛び出す勢いでドアに向かってゆく。

「島津さん、この話は専務からいただいたんです」

新山が叫び、奈々子は棒立ちになった。

「どっ、どうして？ 専務のやつ、どうしてあんたが困るようなことするのよ？」

奈々子は、戸惑っている真子に向かって責めるように言う。

「わたしに言われても……でも、和磨さんからの異動の話なら、きっと新山さんにとって、そのほうがいいと思ってたと……」

真子は新山と目を合わせた。新山は顔をしかめ、重そうに口を開く。

「正直、受けてよかったのか……でも、行くと答えてしまつて……」

「あの専務、あなたに強引に命令したの？」

「奈々ちゃん、和磨さんはそんなひとじゃ……」

確かに和磨は強引なところもあるが、無理強いするようなひとではない。

「そうじゃありません。わたしには過ぎた話なんです。だから……怖くなつちゃつて……期待に応

えられなかったらと思うと……」

どこの職場に異動になったのか見当がつかないが、過ぎた話というなら、新山にとって悪い話ではなさそうだ。

「新山さん、その仕事をやりたいと思ったんでしょう？　だから受けたんでしょう？」

「そうなんですけど……」

それまで話を聞いていた深田が、新山の肩をトントンと叩いた。

「新山先輩、失敗して役に立たないって言われたら、またここに戻ってくればいいですよ」

「深田さんってば、そんな自分に都合よく戻ってなんて来られないわ」

「戻ってくればいいじゃん」

戸惑う新山に、奈々子も軽く言う。

「ここにはあんたを必要とする仕事があるんだから。でも、チャンスなら、やってみる価値、あるんじゃない？」

真子は奈々子の言葉に同意して頷いた。

「戻って……来られるでしょうか？」

新山は戻ってこようと本気で考えているわけではないだろう。たぶん、支えとなるものが欲しいのだ。真子には、新山のその気持ちが痛いほどわかる。

過剰に縋るのはよくないだろうが、支えがあると思うだけでひとは強くいられるものだ。

「うん。絶対、大丈夫」

請け合うように言ったら、新山が笑みをを見せてくれ、真子はほっとした。

「新山さん、あのさあ」

奈々子が、躊躇いがちに新山へ話しかける。

「秘書課にいた頃のおんたってさ、もっとう……なんていうのか、胸張ってたよね。もっといキイキしてたっていうかさ……なんか、悩んでんの？」

その言葉に、新山は唇を噛んで俯いた。

真子には、新山の変化の原因に思い当たるふしがある。

新山は、以前和磨にシステム部への異動を取り下げてくれと懇願し、秘書職から降ろされたのは屈辱だと口にしたことがあった。おそらくいまの彼女は、そんな言動を取ってしまった自分を心の底から嫌悪しているのだと思う。秘書課にいた頃のような、清々しい自信と明るさはなりを潜め、澄んだ瞳にはいつも影が差している。

「奈々ちゃん、新山さんにも色々……」

真子は慌てて取り成そうとした。

「わたし……わたし、最低な人間なんです」

顔を真っ赤に染めた新山は、歯を食いしばる。

「新山さん」

真子は思わず新山の腕に手をかけ、首を横に振った。辛いことを無理に話す必要はない。

新山は真子を見て笑みを浮かべたが、ひどく辛そうな笑みで胸が痛む。

「芳崎さん……だったのでしょうか？ あのととき……」

真子は息を止めた。実は、新山が和磨に懇願しているのを偶然聞いてしまったのだ。真子は彼女の瞳を見つめ、仕方なく頷く。^{うなず}

「ありがとう」

新山がぼつりと言う。真子は唇を噛み締め、小さく「ん」と答えた。

新山は奈々子と深田に、以前和磨に対して取った言動を告白した。話している新山は自虐的な色を瞳に浮かべていたが、話し終えた最後に、ぼつと息をついた。

「そんなの、気にする必要ないじゃん」

取るに足らないことというように奈々子は言った。新山は驚いて奈々子を見る。

「誰だって、そんな経験のひとつやふたつあるよ。きつと、あんたはこれまでそういうことがなかったから、必要以上に自分を責めてしまっただろうけど……。そんな風に自分責めてたらさ、あんた自身が可哀想じゃん」

奈々子の言葉に、新山はくしゃりと顔を歪める。そしてぼろぼろと涙を零し始めた。^{こぼ}深田はにっこり笑って新山の肩をぼんぼんと叩く。

「なんか……いいなあ。みんなが理解し合えて……」

真子は胸をいっぱいにして、「奈々ちゃん」と呼びかけた。

「何？」

「奈々ちゃん、もう最高に見直しちゃったわ。時々あんまり馬鹿なこと口にするから、軽く見ちゃっ

てたけど……」

真子は奈々子に、尊敬を込めた目を向けた。

「あんたねえ」

「あ、あの先輩方。もう休憩時間終わっちゃってますよ。早く戻らないと、また吉田課長にお目玉食らっちゃいますよ」

深田は、そわそわしながら忠告するように言う。

「深ちゃん、言っとくけど、『また』はあんただけよ。行くわよ」

先陣を切って更衣室から出る奈々子に続き、みんな職場に向かって走り出した。

「ところで、新山さん、あなたどこの職場に配属になったの？」

列の先頭を走りながら、奈々子が最後尾の新山に聞く。

「本社です」

「えーっ！」

走っていた三人は、急停止して叫んだのだった。

「真子、ちよつといい？」

昼になった途端、奈々子は無言を言わず真子を職場から連れ出しに来た。

「奈々子先輩、どうしたんですか？ お昼は一緒に食へに行くんでしょう？」

ちと一緒にって話は……」

改造企画部のひとた